『幸吉の旅』

東京女子高等師範學校教授　岡田みつ

（一〇）

お崎は、彌平爺さんが、馬車に馬をつける間、提灯を持つてゝやり、又彌平が支度の途中で眠つてしまはないやうに見張つてゐやうと思つて、納屋へ出掛けていつた。ところが、爺さんは、いつになくテキパキと働いてゐた。そして、どことなく、その動作が、平常と變はつてゐた。時々惡寒でもするやうにブル／＼體を慄はせたり、力が拔けて馬車の轅も支へられないやうな恰好をしたりした揚句に、馬の首ッ玉へぶら下つて、聲を出さずに笑ひこけてゐる風であつた。

「どうしたのさ、彌平さん。」とお崎が訊いた。「また、おきまりの黴が生えたやうな古洒落でも言はうつていふのだらう。洒落なんぞいつてる時ぢやないよ。一體どうしたんだよ。」

彌平は、一段と可笑しさがこみ上げて來たやうに、大きな口を、いやが上にも大きく開けて、

「あ、あ、もう我慢が出來ねい。誰かに話さないと腹が割けちまふ！　まお崎さん、その箱にお掛け。ちよつぴり可笑しい話をして上げるから……だが、人に言つてはいけねいせ、俺…知つてるんだ……あのう……逃げた奴さん……どこ

の邊にゐるかつてことを。」

「お前さんが、あの子を何處ぞへ隱したつていふの？そんな事をしてみたがいゝ。お前さんお鎌さんのうちには居られないよ。それだけは私が請け合つて置く。」

「なんの俺が隱すもんか。たゞね、奴さんがどこに隱れてゐるか、俺に大概分つてるつてことさ俺が思つてゐた通りになつてるから、それが可笑しくてこたへられねいんだ。實はなお崎さんおら五六日前にかう考へたんだよ。あの子供達を貰ひたがる人があつちにも、こつちにもあるやうにすると、あの子達に價値がつくだらうと思つてね。長老の岸田さんだの、お針のお千代さんなんぞを、うまく說き付けたんだ。するとそれが旨くいつてな……あの連中おらの手段に使はれてると知らねいもんで…お千代さんなんか舌る事にかけちやお手のものだからね、あの人は、口動かしてる方が默つてるよりは、どん權なにか樂なんだ。それからな、おら幸吉がいまに、逃げて行くだらうとこの四五日考へてゐたんだが、今日こそやるなと分つたんだ。何故つていふと、今日晝過ぎに、俺んとこへやつて來て……おら、あんまり暑いんで、ちいつとばかり休んでゐた。そこへやつて來て、消然た恰好してね、ま、訊く、訊く、いろんな事を訊くんだ。だが策略なんてものが、てんで無いんだから、あいつの腹ん中見通しなんだ。それで、こいつ逃げるんだなつて事が分つたんだ。だからその時に止めやうと思へば止められたんだ。けれどもまた考へてみると、おらだつて養育院に行くのは嫌だからな、エヽかまはねい、逃げたいんなら逃げるがいゝ、とおら思つたんだ。何故つていふと、逃げれば、中々しつかりした奴だつて事が分るし、邪魔がられるところに、へば

りついてるやうな人間ぢやねいつていふ事も分るんだもの。それにさ、お崎さんも俺もあいつの感心なのは、疾くに知つてるんで、まだ知らねいのは、お鎌さんばかりなんだ。ところが、そのお鎌さんといふ人は、牛みたいな人で、追ひまくつたんぢや駄目なんで、緩くりと賺し〳〵歩かせないぢやいけねいんだから。幸吉が逃げ出した方が、お鎌さんの氣を變へさせる事になるんかも知れないと思つてな。一體おら、ひとを瞞すことはしないが、これは瞞すんぢないもの。幸吉は自分の逃げ出す事を俺が知てると思つてゐないんだから、あいつも公明正大なのさあいつ俺に何も打明けねいんだから俺も公明正大なのさ。それからお鎌さんも、いざとなると立派な事をする人だから、それで差支ないし、お崎さんは、馬が目隱しをしたやうに、右も左も見ないで、正面むいてゐるんだから、これも差

支なしだ。俺はだれの邪魔してるんでもないんだ。たゞ成行に任せて、將來がどうなるか傍で見物してゐるだけなんだ。そしてお鎌さんにしたいまゝをさせるつもりで、あの人が自分で處置をするやうな機會を俺が拵へてやつただけさ。だがなあ、俺いくら自分の好きなやうに企たんだつて幸吉のやうに上手にはとても出來ない。あの置いていつた手紙でもだ。おら、とてもあんなにや書けねい！　あいつのあの氣性はどうだい。犬を連れていつただけで、あとは何も言はねいで、たゞ丁寧にさよならと。言つただけぢやないか。……この上話してると遲くなつて間に合はねいかも知れない。さ、これから牛田の森へ行つて、どんな樣子だか見て來よう。河沿ひの路は、森ヶ崎の方へ續いてゐるんだがつひ先刻、幸吉に、そつちの方へ行くと、干草を澤山作つてゐるつてことだの、ずつといつて

左手に薪にする木が積んである所を通り越すと、黒苺が路傍に澤山あることだの、それからその邊に、馬に被せる毛布が一枚置いてあるところがあるつて話してきかせたんだ。その毛布つていふのは、おら、一ぺん戸外で寢たときにそこへ置いて來たんだ。もつともそれは、つひ今日の五時ごろだつたんだから、今でもまだ、そこにあるだらうと思ふんだ。」

×　×　×　×　×　×　×

彌平とお鎌さんは、半田の森の縁になつてゐる路を無言で馬車を驅つていつた。爺さんは幸吉をいくども半田の森へつれて來た事があるから、幸吉が、このあたりの村へでも行かうと思へば、この路を通りさうに思ふと、お鎌さんに話した。

お鎌といふ人は、生れて五十年間、いかなる夏にも冬にも、その心の中に優しい考が美しい行爲といふ花になつて咲き出てたためしがないのだつたが、柔かい幼な子の手に觸れられあどけない眼に見上げられて、彼女の女性としての優しさがはじめて目覺めたのであつた。

三四哩ほど進んだと思ふころに、遠くで、哀しげな聲が聞こえた。路傍に薪の大きな堆積のある邊へ來ると、ちいさな毛むくぢやらのものが、小高い山の上に立つて、雲もない空に、赤い球のやうに懸かつてゐる月に對つて盛に吠えてゐた。

「あれは、家に死ぬ人がある前兆だらう。」とお鎌は怖氣づいて彌平に尋ねた。彌平は、氣輕るに、

「さう言ひますがね。もしさうなら、成程つていふ事がありますよ。今日、わしは、四疋白い子猫を池にはめて殺しましもの。丁度、その時あのポチの奴、傍にゐて見てゐたから、それで月に向つて吠えてるんでせう……もしあれがポチならね……どうもポチらしいな……やつはりポチだ。さうすると、幸吉は、きつとこの近くにゐ

ます。わし降りて、ちつと探して見ませう。」

「お前はそこにお出で。私が降りる。もしあの子が居たら、私は自分であの子に言ひたい事があるんだから。」

彌平が馬車を、柵のそばで止めると、ポチが跳んでやつて來た。ポチは、一目見るとすぐ馬のお玉だと悟つたのだつた。そして、お鎌さんの靴のそばへ來て「はてな、この靴の臭ひに記憶がある。二三度この臭ひのお見舞をうけた事がある。あ、さうだ。あのお鎌さんだ」とでも考へたのか、いきなりお鎌さんの膝に跳り上つて來たので、お鎌さんは、嫌だと思ひながらも、

「犬つてものが世間で言ふ程伶悧なものなら、この犬は幸吉のゐるところへ案内しさうなものだが。」といつた。

彌平は、用心深く、

「さあ、どうですか。ポチの中にはいろんな犬の性質が入つてゐるから、どの性質が出るか分らないなあ。犬もあんまり雑種になると、その本能もまぜまぜになつてしまふから、あんまり當にはなりませんが、でも、試めしてごらんなさい。じつとしていらつしやい。ポチがどうするか見てゐませう。」

お鎌は靜にしてゐた。ポチはお鎌の裾の邊にからみついた。

「さ、腰かけてごらんなさい。ポチはどうするか？」

お鎌は坐つた。するとポチはその膝に乗つてしまつた。

「こんだは、どこかへ行くふりをしてごらんなさい。すると先へ立つて、案内するかも知れません。」

お鎌はその通りにした。すると、ポチはあとから隨いていつた。

「こいつ間抜けだな。いや、待てよ。分つたぞ。こいつ見掛けほど間抜けでないかも知れない。幸吉は逃げて行きたいんで、見付けられて養育院に押込められたくないんだし、ポチだつてさうなんだから。あなたの氣持が分らないから、ポチの方だつて心持を見せませんよ。ポチ君の考は、どうもさうらしいな。」

ポチがまたお鎌の裾のところへ迫つてくるのでお鎌は身慄ひしながら、

「ポチや、かしこいね。幸吉のゐるところを敎へておくれ。そうしたらみんなでお家へ歸つて、御馳走上げようね。驅けていつて、お前の御主人探しておいで、良いワンワンだからね。」

ポチ推理の方法の分る人、またポチを愚物だとか賢いとか斷定しうる人は、餘程偉い哲學者に相違ない。とにかく、ポチはあらゆる方角を走り盡した揚句に、薪の山の周圍をグル〳〵廻り始めたので、お鎌も、そのあとについて行くと、鼠地の毛布の上に寢こけてゐる子供の姿が眼に入つた。蒼ざめたその顔は、月光を浴びて一層蒼白く見えた。その頰には涙のあとさへあつた。が、樂しい夢でも見てゐるのか、稍々開いた唇には、世にも美しい微笑が漂つてゐた。ポチはこつそり彌平のところへ戻つていつた。(こんな雜種の犬にも、遠慮といふものがあると見えて)お鎌は、眠つてゐる少年の傍に跪いて、

「幸吉や、幸吉や目をお覺まし。」といつたが、何の答もなかつた。

「幸吉や、目をお覺まし。小母さんがお迎に來たよ。」

幸吉は、迎へに來たときいて、ハッとして目を醒まして泣き出した。お鎌さんを見て、事の成行を悟つたのだつた。

「小母さん、おねがひです。院にやらずにおいて

下さい。どこか他處へやつて下さい。そこからは決して〳〵逃げ出しませんから。」

「まあ、この子は、小母さんは、うちへ連れて歸らうつていつて迎に來たのぢないか。」

あんまり話が結構すぎて、眞實とは思へなかつた。

「小母さんの家では、僕は邪魔なんです。」とためらひ〳〵幸吉はいつた。

「どの人も〳〵お前に歸つてもらひたい」と、いつてるんだよ。」と今まで誰もきいた事もない優しい聲でお鎌は答へた。「お崎小母さんも、菊ちやんも、お前を待つてゐるよ。彌平の小父さんは、馬車で、こゝに來てゐるよ。お前に歸つてもらひたいつてね。」

「だけど、あそこは小母さんの家で、小母さんは僕を邪魔なんでせう。」と、幸吉は口ごもつた。

「小母さんは、誰よりも一番お前に歸つてもらひたいんだよ。小母さんは、お前がゐなくては困るんだよ。」といひながら涙を流して「どうぞ勘忍してくれ。小母さんがわるかつたんで、お前が氣をわるくして逃げ出したんだ。勘忍して、うちへ來て、いつまでも〳〵小母さんの子になつておくれ。」

「ぢや小母さん！ 僕たち二人とも小母さんに貰はれて、始終小母さんとこにゐて院へは決して行かないの。」

といつて、幸吉は、感謝のあまり、お鎌さんの首にしがみついた。

（一二）

「彌平さん！ もう七時になるのに、朝の仕事がまだ一つもしてないよ。知つてゐるの？」

彌平は欠伸をしながら、寢返りをして、お崎の聲をきいてゐた。折角の心地よい朝の眠りを邪魔するその聲は、爺さんの良心の聲よりも、余つ程

喧ましいのだつた。

「彌平さん！　オイ！　聞こえないの？」

「きこえないどころか。浦島だつて、さう間近で怒鳴られたら、目が覺めてしまふワ。」

「ぢや、起きるかい？」

「さう、やかましく言ふなら起きるよ。だが、かう出しぬけに起こさないでくれゝばいゝに。お日樣が昇れば、自然におらだつて目を覺すに！　さ、今、起きるぞ。」

「今、起きるぞ位で安心できるものか。起きて歩く音がするまで、こゝに居る。」

「今、すぐ、起きるつて云つてるのに！」

「お前さんの『今すぐに』は。それは長いんだから、一生の中に一度『今すぐに』をすると、命がおしまひになつてしまふ。」と言ひ捨てゝ、お崎は去つてしまつた。

加藤のうちの秋は美しかつた。果樹園では葡萄が紫色の房を垂らしてゐるし、熟した果物の匂ひが、あたりに充ちてゐた。ピンクの「しもつけ草」は、石の塀のそばで、羽毛のやうな花瓣をちらつかせ、「あきのきりんさう」は、路傍に、豊かに咲き亂れてゐた。黄色い唐茄子は、庭の隅に山と積んであるし、稻の穗は重みに堪へかねてうつ向いてゐるし、豆は、黄色の莢から、今にもはぢけさうになつてゐた。

　お崎は、お鎌さんと二人で、林檎の皮をむいてちいさく切りながら、

「どうしたんだか、この頃、私は元氣になつて、はしやぎたくてしかたがないんですよ。やつぱりあの子供達のせいでせうか。小母さん〳〵つて後を追つて來てね、私に手を曳かれて、やれ豚を見にゆかうの、雛鳥(ひよつこ)を見にゆかうのといつて行かなければ承知しないのですよ。ああ、それで思ひ出した。今朝、小學校の先生が通りかゝ

つたから、私走つていつて、幸吉が學校でどんな風だかきいて見たんです。さうしたら、先生がいふには、幸吉は、この邊で珍らしい子なんだつて。どんな本でも先生が讀ませると始めてゞなく、まるで、復習してゐるやうによく讀むのだつて。金曜日の午後の演習の時に、幸吉が暗記したお話をすると、あとの子供は、みんな口をあいて聞き入つて、中には、泣いたり笑つたりするのもあるんだつて。あの子の作つた文を見せてくれるつて言つてましたよ。」

× × × × × ×

もう夕方になつてゐた。お鎌さんと彌平は、水曜日の夜の集まりに出掛けてしまつたので、お崎は、幸吉を連れて、買物に行かうと思つて、かれを探してゐた。 つひ三十分程まへに、お崎は、幸吉が書物をもち、菊孃は羽毛のやうに草の上を跳びながら、庭の方へゆくのを見かけたのだつた

お崎は、四阿(あづまや)の方へ行つてみた。すると、幸吉は居ないで、菊孃が、獨りで「お茶の會」をしてゐた。その様子が、いかにも可愛いらしいので、お崎は、小蔭にひそんで立ちぎゝしてゐた。

まづ、卓の上に瀬戸物の片らだの貝殻などが、お皿の代りに、四人分並べてあつて、その中に林檎の小片と、生薑(しやうが)パンが盛つてあつた。二つ三つ人形が、御客として席についてゐた。その中に一つ首の無いのもあつた。菊ちやんは、別の一人を抱いてゐたが、それこそ病院で寢たきりになつてゐなければならない程の容態なのだつた。靴のボタンで出來てゐるその眼の片方は、麻糸の端からぶら下つてゐるし、その鼻は、やつと所在が分る位に摩り滅らされてゐた。赤い毛糸の口は、糸がほどけて、黄色の毛糸の髪の毛は、安全ピンで留めてあり、横腹の孔から、臓腑が瞰いてゐた。ボチは、卓の上座に着いて、首無し人形の隣にゐた。

首無しさんの御馳走も自分がせしめる目論見らしいのであつた。菊嬢は、膝の上の破れ人形に對つて、

「あのネ、加藤のおかまちやん、いゝ事話して上げよう。今夜おとなにして、早くねんねするとネ、あしたいゝもの上げユよ。（一言一句に菊ちやんは、その人形を抱きしめるのだつた。）おまへちやん、くたびエた？　くたびエないワネ。まだ眠くないの？　そんなら、菊ちやん、いゝお話して上げユ。むかち〱、ちいちやな、鷄が居たとさ。十五、たまご生んだのよ。ちようちたらちよん中から、十一だか、十七だかちいちやな、ひよつこが出たの。ちようして、お鎌小母ちやんが、みんな育だての。いゝおはなちでちよ。」

聞いてゐたお崎は、何故とも知らず、涙が出てしかたがなかつた。默つてそこを立ち去つて、門のところまで來ると、丁度、果樹園から、幸吉が出て來たのに出會つた。この子は、時々思ひもよらない事を考へついて、お崎とお鎌を驚かせまた感心させるのであるが、その一つは、晴れた夕方に、果樹園に忍んでいつて、誰にも何ともいはないで、加藤のお政さんの墓へ、花束を飾つてくる事だつた。お鎌さんが、窓から見てゞも居ると、幸吉は、小母さんと僕とには、分つてゐるネ。だから何にもいふには及ばないや」とでも、いふ風に、穩かに微笑んで見せるのだつた。すると、お鎌さんは、以前のやうに、こんな事を心の奥に秘めて人には言はないのだが、更に更に、幸吉を可愛いく思ふのだつた。（終り）